7　次の文章を読み、後の問いに答えよ。〈名古屋市立大〉　二〇一四年度出題

　『となりのトトロ』を二〇〇回以上見ている。それでもまた新たに見るたびに、すごいなあ、すぐれているなあ、よくできてるなあ、と感心する。ディテールの作り込み方が半端ではないのだ。

　とりわけ、村の入り口にあるお稲荷さんやバス停の稲荷前のお稲荷さんの描き分け。同様に、村の辻や通学路や村境に位置するお地蔵さんや六地蔵さんの描写。その使い方と映像的・景観的な取り込み方。まったく驚嘆するほど絶妙のうまさである。日本人の民間信仰の日常と生活文化と生活風景をこれほど違和感なく描き切れる監督が他にいるだろうか。

　それでは、タイトルともなっているトトロとはそもそも何モノか？　日本の民間信仰や民俗学や宗教学の観点から見ると、トトロとはａマゴう方なく日本の「カミ」である。もちろん、トトロは楠木のを棲み処とする森の動物として描かれているのであるが、しかし単なる動物ではない。動物の姿を持って立ち現れる不思議な存在、「カミ」なのである。そのことは、トトロの棲み処に行き着くためには、この世の道とは違う別の小道、すなわちスピリチュアルな小道を辿らなければ行きつけないことからも明白である。「カミ」の世界と交わるためには、この世の道とは異なる別の回路が開かれなければならない。

　存在世界には二つの道が隣り合い、重なり合っている。時に、それは交錯し、次元融合する。メイがチビトトを追いかけてその道に足を踏み入れたように。あの世（異界）の道とこの世の道は時折開通し、交互交通することがある。メイとサツキの方からの踏み入りもあるが（それぞれ一回ずつ）、稲荷前バス停に現れてネコバスを待つなどトトロの方からの越境もある。メイはチビトトを追いかけていって楠木の巨木の「」から偶然トトロの世界に入り込んだ。姉のサツキは、行方不明となった妹のメイを助けるために、トトロに会いたいと祈りを凝らした時に道が通じて、意識的にトトロの世界に入り込んだ。メイはアシャーマン的な交通によって、サツキはイプリースト（司祭）的な交通によって、トトロと交信した。

　さて、日本人にとって「カミ」とはいかなる存在であるかを考える際に、本居宣長が『古事記伝』巻三に、「凡てとは、への御典等に見えたる天地の諸々の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云はず、鳥獣木草のたぐひ海山など、其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありてきものを迦微とは云なり。すぐれたるとは、尊きこと善きこと、しきことなどの優れたるのみを云に非ず。悪しきものしきものなども、よにすぐれて畏きをば、神と云なり」と記していることが参考になる。

　宣長は、古典に記された神と表記されるカミ、神社に祀られた諸霊のカミ、鳥獣木草・海山など何事においても優れたところのある畏きもの、それらはみな「カミ」だと述べている。平たく言えば、「カミ」とは「超すごいモノ」であり、日本人が抱いてきたある特定の聖なる感情や情報や力や現象など霊的各ファイルをすべてまとめて取り込む「聖フォルダ」なのだ。

　たとえば、イカヅチ（雷神）・ミヅチ（水神）などの「チ」系ファイルのカミガミ、ヤマツミ（山神）・ワダツミ（海神）などの「ミ」系ファイルのカミガミ、ムスヒ（産霊）・ナホヒ（直霊）などの「ヒ」系ファイルのカミガミ、アメノミナカヌシ（天之御中主）・オオクニヌシ（大国主）など「ヌシ」系ファイルのカミガミなど、「ヤオヨロズ（八百万）」と言われるほど多くの多様なカミガミを総称・総括する統括ファイルとしてのフォルダが「カミ」なのである。

　こうして、自然の森羅万象の動きとはたらきの中に霊性・霊威・神性・神威の生成と顕現を見てとる感知力が、最終的に、「カミ」という包括「フォルダ」の中に折りたたまれ、束ねられていったわけである。

　わたしは、そうした日本の「カミ」観が縄文時代の精霊的信仰から現代のトトロ像まで日本列島の宗教文化の基層信仰を成していると考えているが、『となりのトトロ』が縄文的な基層信仰をふんだんにちりばめていることに注意したい。

　まず、オープニングのタイトルバック。四歳の少女メイが「道」を元気よく歩いていくと、そこに、トカゲや蛙やカマキリやバッタやムカデや蜘蛛が次々と登場してくるのだが、その大きさがみなメイと同等に描かれている。そこには生命に関するいかなる序列もない。メイは動物たちを支配する特権を持っているわけではないし、人間が生命世界ないし存在世界の中で特別に偉大であるとか偉いということはまったくない。そうではなく、他の動物たちと同じ大いなるウいのちの分節・分与として同列・同等である。

　サツキとメイの姉妹は、引っ越ししてきた家の庭先で「ドングリ」を見つけるのだが、この「ドングリ」が物語のインデックスともエヴォケーター（喚起源）ともなっている。二人は、「ドングリ」を媒介としてトトロと出会うことになるのだから。

　森をいのちの海と捉え大切にしてきた日本文化において、「ドングリ」はまず縄文人の主食として現れてくる。そのドングリのアク抜きをするために縄文土器は作られた。ドングリを通して、メイは「森のヌシ」と出会ったのだ。

　「森のヌシ」とは、先に述べたように、『古事記』や『日本書紀』などにも描かれた天之御中主神や大国主神や事代主神や一言主神を持ち出すまでもなく、「森のヌシ神」を意味している。その「森のヌシ神」のトトロが、ｂ注連縄の張られた大楠の洞の中に棲んでいる〝ヌシの神〟なのである。沖縄でも、「ニラーハラー（ニライカナイ）」の太陽のヌシの神を「ウプヌシガナシー（大主神）」と呼んでいるが、「森のヌシ神」がトトロというわけである。

　動物の姿で顕現するその「森のヌシ神」を『古事記』に当てはめるならば、国つ神の代表神で、蛇の姿で現われる三輪山の森の神「大物主神」に該当する。

　縄文考古学者のメイの父（草壁タツオ）はトトロと会ったと言い張るメイに、「メイはきっと、この森の主に会ったんだ。それはとても運がいいことなんだよ。でも、いつも会えるとは限らない。」とｃ諭す。この場面は、何度見ても感動する。宮崎さん、よくわかってるなあ、と。そして、こんな言葉がけのできる父親を持ったら、子供はぐれることもなく素直に育つだろうなあ、と。こんな男性と結婚した女性は幸せだろうなあ、と。そして、この一家は「塚森」に挨拶に行く。まさに、そこは「鎮守の森」なのだが、そこにはメイがトトロと出会った巨大な楠木がすっくと立っていた。メイは思わず、その樹に駆け寄るが、そこには「孔」はない。それは、この世から見た楠木の風景だからである。

　トトロの側から見たら、巨木の根元には出入り口となる「孔」がある。だが、その「孔」の代わりに、この世には小さな祠（神社）がある。神主さんも住んでいないその神社は、村の人が守っている小さな「鎮守の森」である。

　姉のサツキは、自分もトトロに会いたいと言う。すると、草壁パパは、「そうだなあ。運がよければね。立派な木だなあ。きっと、ずーっとずーっと昔から、ここに立っていたんだね。昔々は、木と人は仲よしだったんだよ。お父さんは、この木を見て、あの家がとても気に入ったんだ。お母さんも、きっと好きになると思ってね。」と子供たちに言い、「さっ、お礼を言って戻ろう。」と二人を促し、「気をつけ。メイがお世話になりました。これからもよろしくお願いいたします。」とペコリとおじぎをする。

　この場面は、宮沢賢治の『注文の多い料理店』の中の童話「と、」を想起させる。森の近くに引っ越ししてきた農民たちが森の「ヌシ」たちにお供えを捧げて挨拶するのだが、まさにこの草壁一家の行動パターンと同じ心意と行動様式であった。そしてそれは、今なお引っ越しや新築に際しｄジチンサイを行なう心意ともつながっている。

　ところで、トトロが神性を持っていることを表わす別の場面があるので、そのことに触れておこう。サツキとメイが稲荷前バス停でトトロと出会った後、父親にその出会いを報告する際、二人は、「コワーイ。ステキーッ。コワーイ。」と繰り返す。怖いけれども、魅惑的でとても惹き付けられるという、相反する感情を生起させるものこそ「カミ」などの「聖なるものDas Heilige」であるのだが、ドイツの宗教学者ルドルフ・オットーは『聖なるもの』の中で、その聖なるものの体験を「ヌミノーゼ」と呼んでいる。畏怖（コワーイ）と魅惑（ステキーッ）という両極感情を生起させる存在が「森のヌシ神」のトトロなのである。

　もう一つ、満月の夜の夢の中にトトロが現れて、庭にいたドングリの実を祈りあるいは念力でぐんぐん芽を出させ、成長させる場面が描かれるが、明け方、二人が目を覚まして、庭を確認すると、夢で見たのと同じ大きさではなかったものの、そこには確かに木の芽が出てきていた。二人は小躍りしながらその周りを廻り、合掌しておじぎをしながら、「夢だけど夢じゃなかった。」と叫ぶのであった。

　この夢と現実との入れ子構造。夢は現実と成り、同時に、現実から夢が生まれるという、夢と現実の相互交通。その神秘・不思議・奇跡・ミラクル。それこそが、シャーマニスティックな霊的交通といえるものである。宮崎駿監督は、そのような森のヌシとの交信の世界を実に巧みにかつ宗教色を感じさせずに描き切っている。見事、である。

　さて、「鎮守の森」と楠木をテーマとするとなると、ここでを登場させずにいられない。なぜなら、草壁パパのモデルの一人は南方熊楠だったともいえるからだ。そして、トトロが棲んでいた楠木のある「鎮守の森」のもっとも古い形は、「大物主神」という「ヌシの神」の住む「三輪（御諸）の神杉」を持つ大神神社のある三輪山だからだ。この、鎮守の森→トトロ→大物主神→三輪山とリンクする生態学的サークル（美輪）をろうと神社合祀反対運動をラディカルに展開したのが、「熊」という動物と「楠」という植物の名前を持つ、まさにトトロ的ｅエンカンの守護者と言える南方熊楠であるからだ。

　熊野の入り口に当たる海南市の藤代王子社の境内社・楠神社の宮司に名前を付けられた南方熊楠は、今からちょうど一世紀前の一九一〇年ごろ、生態学と民俗学の研究に基づきつつ神社合祀反対運動を展開した。明治政府は、神社を行政単位である一町村に一社に統合整理しようとした。そうすると、古くからある「鎮守の森」のような里山や小さな森の社や祠はすべてなくなってしまう。これは、トトロを森から追い出してしまう仕業だ。

　森の守護者である熊楠によると、神社合祀は、①敬神薄くし、②民の和融を妨げ、③地方を衰微させ、④国民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を害し、⑤愛国心を損ない、⑥土地の治安と利益に大害があり、⑦史蹟と古伝を滅却し、⑧天然風景と天然記念物を亡滅する。つまり、日本人がこの日本列島の風土の中から感受・感得してきた「カミ」に対する感覚をないがしろにしてしまう浅薄皮相きわまる無謀なる政策であるということになる。

　こうして熊楠は、激烈な神社合祀反対運動を展開するのであるが、その論理はまことに体系的かつ網羅的で、「神社合祀」という上から目線の官僚（お上）的な行政がゴリ押しする強制的暴力的政策の問題点と欠陥を鋭く突いていて、その論理は未来的意味を持っている。

　この点で、南方熊楠と宮沢賢治は日本近代における「生態智」思想探求の先駆者である。熊楠は神社の森、すなわち「鎮守の森」は、日本の誰の心にも清らかな感覚と日本の風土の良さを感得させ、誇りを持たせる魔法の力を持っていると主張したのだ。そしてそれは、日本人の「カミ」感覚の基盤をなし、現代の「野外博物館」の先駆モデルとしたのである。

　しかもこのとき、熊楠は、いち早く、「エコロギー」という言葉を使って、生命の宝庫としての神社の森（鎮守の森）を護り、社会運動を生態学的な生命研究と接合している。

　「殖産用に栽培せる森林とり、千百年来を入れざりし神林は、諸草木相互の関係はなはだ密接錯雑致し、近ごろは「エコロギー」と申し、この相互の関係を研究する特種専門の学問さえ出で来たりおることに御座候」、「昨今各国競うて研究発表する植物学ecologyを、熊野で見るべき非常の好模範島（神島のこと）」と。

　一〇〇〇年単位で樹を伐らずに護ってきた「神林」は、いろいろな草や木が相互に、「密接錯雑」している。つまり、エコロジカルな相互関係やエンカン性を持っている。その典型が田辺湾に浮かぶ美しい島「神島」であると主張したのだ。世界を護るためには各地域のローカルで小さな森を守らなければならない。コミュニティの生産と消費、つまり地産地消の原点は、山・森（奥山・里山）─野原─田畑─川─海の連鎖の中にある。「カミ」は小さな地域の森の細部に宿り給う。

　この南方熊楠の論点とその運動は、「鎮守の森」を護る黄金律ともいえる運動論理であるが、これは宮崎駿監督の作品の思想性にも深く通じている。 （鎌田東二「鎮守の森から見たトトロ論」に基づく）

問１　文中のａからｅの漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直せ。

ａ　マゴう　　ｂ　注連縄　　ｃ　諭す　　ｄ　ジチンサイ

ｅ　エンカン

問２　文中の「カミ」とはどのようなものと筆者は考えているか、文章全体から考えて簡潔に説明せよ。

問３　文中傍線部ア「シャーマン的な交通」とイ「プリースト（司祭）的な交通」の違いについて、簡潔に説明せよ。

問４　文中傍線部ウ「いのちの分節・分与」とはどのような意味か、簡潔に述べよ。

問５　文中の「鎮守の森」とはトトロならびにサツキとメイにとってどのようなものだと筆者は考えているか、簡潔に述べよ。

◎問６　筆者は、「となりのトトロ」をどのような作品であると捉えているか、宮崎駿監督と南方熊楠と宮沢賢治に相通じるものは何かを踏まえながら述べよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝紛（う）　ｂ＝しめなわ　ｃ＝さと（す）　ｄ＝地鎮祭　ｅ＝円環

問２　「カミ」は、Ａ畏怖と魅力の両極感情を引き起こし、Ｂ縄文以来の日本の基層信仰の対象となる、Ｃ各地域に存在する霊的存在であり、人智を越えたＤ自然の森羅万象を包括するもの。

Ａ・Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３／Ｂ＝２

Ｃ＝２〔「各地域に存在」がなければ減点１。「霊的」は必須。〕

Ｄ＝３〔「森羅万象」との関連は必須。〕

問３　アはＡ偶然に霊的な純粋さを持つ者が現実世界から異界へと入り込むのに対して、イはＢ「カミ」との交流を強く祈り、意識的に異界へと入り込むという違い。

Ａ・Ｂがなければ全体０。「入り込む」は「道が通じて入り込む」としても可。

Ａ＝５／Ｂ＝５

問４　Ａあらゆるいのちが「カミ」の霊性から分かれてＢ顕現したものということ。

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５

Ｂ＝５〔「与えられ、現実に姿として現れたもの」も可。〕

問５　Ａ森のヌシ神として存在するトトロと、Ｂ純真な人間の子供が、Ｃ同じ霊性を持つ者として、Ｄ交信できる不思議な場所。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「存在する」は「棲まう」でも可。〕

Ｂ＝２

Ｃ＝２

Ｄ＝４〔「ヌシ神」と「子供」の前提と「交信できる場所」は必須。〕

問６　Ａ生命の宝庫としての「鎮守の森」のようなＢ里山や小さな祠は、Ｃ日本人の民間信仰の日常と生活文化と生活風景そのものであり、これをＤ護るべきだと思わせる作品。

Ａ・Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝３

Ｂ＝２

Ｃ＝３〔「民間信仰」と「生活」は必須。〕

Ｄ＝２